

【翻 訳】

## ドイツ統一記念式典での連邦大統領フランク＝ヴァルター・ シュタインマイアーの演説 マインツ、2017年10月3日<sup>1</sup>

齋 藤 義 彦 訳

「昔への郷愁はない。昔の悩みには。ドイツ ドイツは再びひとつになった。ただ僕はまだ引き裂かれたままだ。」

私たちは例年通りドイツ統一を祝っています。もちろん私たちが東（ドイツ）と西（ドイツ）が再統一された10月3日を祝うことには理由があります。<sup>2</sup>

しかし今年はいささか事情が違います。私が冒頭で引用したヴォルフ・ビーアマンだけではなく、他の多くの人々が問い、心配、不安をもって私たちの国の内的統一を見ています。<sup>3</sup> これも今日の一面です。この一面を今年は特に強く感じます。

しかしまたもう一面があります。この一面を私は今日この広間に集っているのを見ることができます。16州から来た青年、生徒たちです。今日のこの日に皆さんに心から歓迎の意を表します。

「ドイツ統一の日？」と皆さんはいぶかしく思うかもしれません。「どうして一年に一度なのか。ドイツ統一は日常のことになったのに。一年365日それも27年たっている。皆さんは他のドイツを経験したことすらありません。統一ドイツに生まれ、住んでいる、まったく若く、人生を楽しむ世代が登場したのです。」

親愛なる青年諸君、この国の未来は皆さんのものです。私たち親、祖父母の世代は、27年前に達成されたものを皆さんに引き継ぐ義務があります。統一された、自由で平和なドイツです。今日私たちが動かすものが、喜びであろうと葛藤であろうと、幻滅であろうと希望であろうと、統一されたドイツ、自由で民主的なドイツ、不安ではなく、自信を持って未来を展望することができるドイツ、このドイツを私たちは子供たちに残す義務があります。

親愛なる青年諸君、確かに統一ドイツは日常のものになりました。確かに私たちは今日日常的なものを祝っていますが、それは決して自明のものではありません。統一の後生まれ、当時を知らな

い人たちには、当時その場にいた人たちに尋ねることを私は勧めます。

東ヨーロッパから来た私たちの来賓に尋ねてみてください。その自由と民主主義への意思が東側陣営を揺るがし、ベルリンの壁に亀裂を加えた、ポーランドやハンガリーから来た人々に今尋ねてみてください。<sup>4</sup> 憎悪でも暴力でもなく、平和的抗議と大いなる勇気を持ってこの壁を崩壊させた東ドイツ出身者に尋ねてみてください。<sup>5</sup> 政治家に尋ねてみてください。具体的には、統一ドイツは平和なドイツになると私たちに信頼してくれた、西側と東側の政治家をグーグルで検索してみてください。<sup>6</sup> そして、特に今年は、歴史的機会を悟り、統一という仕事を政治的に可能にしたこのラインラント・ファルツ州出身の政治家、3ヶ月前に亡くなったヘルムート・コールのことを調べてください。

皆さんが生まれたドイツは、ヨーロッパに戦争と荒廃をもたらした、無軌道な民族主義から、また、冷戦の中分裂した国家からヨーロッパの真ん中で民主的で強い国になるまでの実に長い道のりを歩んできたドイツです。私たちの道は私たちのヨーロッパの隣人たちと平和で友好的な関係を保つ道でなければなりません。この道は決して民族主義へと退行するものであってはなりません。<sup>7</sup>

ドイツ統一は日常のものとなりました。しかしこのことを私たちは本当に毎日実感しているでしょうか。いつ私たちは、8千万人の共同体の一員であることが出来るでしょうか。

多くの人たちにとってそれは9日前の9月24日だったでしょう。自由平等の選挙権が私たちを結び付けています。このことを私たちは近所の人たちと一緒に投票所の前の列に並ぶことで毎回実感することができます。9月24日には過去2回の連邦議会選挙のときよりも多くの人々がこの誇りある権利を行使しました。このことはいい知らせです。

しかし同じ日の夜私たちの多くは、統一の確かな実感よりも、むしろ至るところで大小の亀裂が走っている国を垣間見ているという感情に襲われました。この9日間書きたてられてきた暗い没落の筋書きを私はまったく評価しません。しかし祝日だからといって、あたかも何事も起こらなかったようにして「(選挙の結果を) 棚上げにしてこれまでどおり」というわけにもいきません。特に私たちは選挙結果を政党、議会会派、組閣交渉に丸投げにすることは許されません。確かにこれらの機関が最も重い責任を負っています。しかしこの信号は私たち一人ひとりに向けられており、それに答えるのは私たちドイツ人です。

最初の問いは、「私たちドイツ人」とはいったい何者であるかです。今日10月3日に私たちは確認することができます。確かにドイツ統一は政治的的日常になったと。私たちの国を分断していた大き

な壁は取り払われました。しかし9月24日には別の壁が据えられたということが明らかになりました。この壁は鉄条網や死の境界線をもっているわけではありません。しかしこの壁は共通の「私たち」を分断しています。

私たちの生活世界を分断している壁のことを私は語っています。都市と地方の壁、オンラインとオフラインの壁、貧乏と裕福の壁、年寄と若者の壁、これらの壁に隔てられて互いに相手の姿が見えなくなっているのです。

インターネットの反響室をめぐる壁のことを私は語っています。そこでは論調がますます声高に、ヒステリックになっており、それにもかかわらず互いに会話が成り立ちません。なぜなら私たちはもはや同じニュースを聞くこともなく、同じ新聞も読むことはなく、同じ放送を聴くこともなくなったからです。

また私は疎外、幻滅、憤りから生じた壁のことを語っています。多くの人たちにとってこの壁は不動のものとなり、議論が通じなくなっています。この壁の内側では民主主義やその代表者、いわゆる「体制」に対する深い不信感が煽られています。この体制には、自称反体制の戦士以外の誰も数えられています。<sup>8</sup>

私の言うことを誤解しないでください。背を向ける人が皆すぐに民主主義の敵だというわけではありません。しかし背を向けた人は民主主義から失われたのです。ですから10月3日には9月24日のことを語る必要があります。

もちろんそれは論争を伴います。差異は私たちに固有のもので、私たちは多様な国です。しかし重要なのは、私たちの差異から敵対関係を生み出さないこと、違いから非寛容を生み出さないことです。

敵対関係が根を張らないこと、非寛容が政治的現実とならないこと、これは今日の政治の課題です。そのためには議会が最も重要な場所となります。今年の10月3日は過渡期に当たります。旧議会はもはや召集されず、新議会はまだ召集されていません。ただ確かなことは、9日前に選出されたドイツ連邦議会はこれまでと違ったものになるということです。この議会は私たちの社会に存在している鋭い対立や不満を反映するものになります。議論は険しくなり、政治文化は変貌するでしょう。<sup>9</sup>

しかし今日私たちとともに臨席している議員の皆さん、皆さんは今後民主主義に大いなる貢献が

できます。民主主義を罵倒する者たちよりも民主主義者がよりよい解決策を持っていることを皆さんは示すことができるのです。責任を引き受けることに憤りは代わることはできないということを皆さんは証明することができます。タブーを破ることで次のテレビ討論会に招かれることがあっても、問題の解決にはまったく貢献しないことを皆さんは証明することができます。憤りのスローガンよりも理性的な論証のほうが問題を解決することを皆さんが証明すると私は確信しています。

憤りではなく理性的な議論が必要なのはまさに私たちの国を過去2年間最も揺るがしてきた問題においてそう言えます。難民と移民です。これほど対立する意見が容赦なく対立しているものはありません。それは家族同士、夕食時まで入り込んでいます。一方にとって命題的な「人道的命法」であるものが、他方にとっては「自民族に対する裏切り」と罵倒されているのです。この問題がこの二つの対立点の間の道徳的戦場である限り、本来の課題に取り組むことができないと私は恐れています。つまり世界の現実とわれわれの国の可能性を調停するという課題です。<sup>10</sup>

人々の困窮に対して私たちは平然としているわけにはいきません。平和を生み、アフリカの大部分にある困窮を防ぐために私たちはより多くのことをなさねばなりません。私たちの基本法は正当な、繰り返し想起しなければならないドイツの歴史的な理由から、政治的迫害からの保護を保障しています。しかし私たちは誰が政治的に迫害され、誰が経済的理由から難民になっているのかという区別ができるようになって初めて、将来にわたって政治的に迫害された人々を保護することができるのです。

私たちは二つの点で正直になるべきです。ひとつにはこの二つの難民となる理由の背後には過酷な人間の運命が隠れているとしても、それらは同じものではなく、私たちの憲法の同じ無制限の要請を根拠付けるものではないということです。二つには私たちはどのような、どれだけの数の移民を望んでいるのか、それどころか必要としているのかという問いに対し正直でなければなりません。私たちは移民の排除を望むのではなく、亡命とヨーロッパの共同の努力を別として、移民のドイツへの合法的な受け入れ方を規定し、私たちの基準に従って移民を管理することも必要だと私は考えています。この二つの問題で正直になることで、私たちは議論の二極化を防ぐことができるでしょう。政治がこの課題を引き受ければ、この問題で私たちの国に生じた非寛容の壁を取り払う機会が訪れると私は確信しています。これは緊急の課題です。<sup>11</sup>

難民と移民の議論はドイツを揺るがしました。しかしこれは動揺する世界の帰結であり、写し絵なのです。大変動、多くの国際的危機や紛争を目の当たりにして多くの市民が、過去数年間の間、「世界をもう理解できなくなった」と語るのを私は聞いてきました。正直に言えば、私はこの言葉に共感できました。

今年私の新しい職務に就いて、私はもうひとつ別の言葉を聴きました。「私の国をもう理解できなくなった」というのです。この言葉は私をより追い詰めました。

G20への抗議行動の後で私はハンブルクの店主たちに来て聞きました。「まったく普通の通行人が野次馬や略奪者になるのを目撃した。」ピッターフェルトではある女性が次のように語りました。「私は選挙演説を聴こうとしていました。しかしそこには怒鳴り声や憎悪をあらわにした隣人や市民が居り、恐怖を覚えました。」シュトゥットガルトではわたしは自動車産業の労働者、ちなみにトルコからの移民労働者の子息が語るのを聞きました。「長い間私はドイツの模範的産業で働いていることに誇りを感じてきました。しかしいまや皆、私もうそをついたのかと問われる始末なのです。」

また私は一度ならず東ドイツで聞くことになりました。「私の会社は倒産した。私の村から人がいなくなった。おたくがヨーロッパの心配をするのは結構だが、私達のことを誰が心配してくれるのか。」

祝日にこのようなことを聞くことは嫌でしょう。しかし誰かが「わたしは自分の国でのけ者にされているような気がする。」と言えば、「残念だけど、時代は変わったんだ。」と答えるわけにはいきません。もし誰かが「私は私の国をもう理解できない。」と言うのであれば、ドイツで何かしなければならぬことがあるということです。それは成長と経済の統計でいい数字を示すということに留まりません。

なぜなら理解し、理解してもらおうということは、誰もが望むことであるし、生活を自信を持って送るために誰もが必要としていることだからです。理解し、理解してもらおうということ、それは故郷です。<sup>12</sup>

故郷に憧憬を感じることは古いことだと私は考えません。その反対です。世界が私たちの周りでよりめまぐるしく変化すればするほど、故郷への憧憬は強くなります。私がよく知っている場所、居場所がわかるところ、自分の判断を信じていることができる場所への憧憬です。このことは変化の大波の中で多くの人にとってより困難になりました。

この故郷への憧憬を私たちは、「やつらに敵対するわれら」、血と土というたわごととして故郷を捏造する者、そのようなものは存在しなかった崇高なドイツの歴史を描き出す者たちに委ねることは許されません。故郷への憧憬、つまり安全、ゆとり、絆、そして何よりも認知への憧憬、この憧憬を私たちは民族主義者に委ねるわけにはいきません。

故郷は未来を目指すものであり、過去を目指すものではないと私は信じています。故郷とは私たちが社会としてこれから作り出す場所なのです。故郷とは「私たち」が意味を持つ場所です。私たちの生活世界を隔てる壁を越えて私たちが結び付けてくれる場所、そのような場所を民主的な共同体は必要としています。ドイツもまたそのような場所を必要としています。

ドイツを旅して私はすばらしい経験をしました。故郷があるところには、多くの物語がありました。ゼーンケ・ヴォルトマンのルール地方の故郷映画である新しい映画『夏祭り』の中でひとりの正真正銘のボッフムの人が言っています。「故郷、物語がここではいたるところ路上に転がっている。ただ拾い上げればいいのさ。」

これが始まりでなければならぬと私は考えます。互いに頭越しに素通りすることはやめましょう。私たちは私たちの物語を拾い集めましょう。9月24日の後自分の居場所で理解できないと嘆いた所、互いに頭越しに非難しあった所で、私たちは互いに耳を傾けることを学ぶべきです。私たちはどこから来たのか、私たちはどこへ行こうとしているのか。私たちにとって何が大切なのか。

東ドイツの人が、東ドイツの故郷がドイツ統一後根底から変わってしまったと語る時。新しい自由が憧憬の的であったばかりではなく、無理な要求でもあったと語る時。変化の中でとっておきたかったものの多くが失われたと語る時。その時はこれらのこともドイツの物語に含まれるのです。統一の実現は荒業でした。もちろん1990年以降にも間違いはありました。そのことについて沈黙する理由はありません。東ドイツの人々は再統一後、西側の私たちの世代が経験したこともない断絶を経験しました。にもかかわらずこれらの東ドイツの物語は、西ドイツのそれと比べて、「私たち」の確固とした要素とはなりません。これらの物語が確固とした要素になるときが来たとは私は考えています。

勇敢な弁護士であり作家でもあるサイラン・アテッシュ（トルコ系ドイツ人）が最近私に語りました。「イスタンブールでボスポロス海峡を再び見ると私の心は高鳴ります。そしてベルリンへの帰路テレビ塔を再び見るとまた私の心は高鳴ります。」アテッシュの物語には単純ですが重要なことが含まれています。故郷は複数形でも存在するのです。人はひとつ以上の故郷を持つことがあり、新しい故郷を見つけることもできるのです。このことをドイツでは数百万の人たちがすでに証明しました。彼らは皆私たちの「私たち」の一部になりました。移民の数世代の人たちが今日誇りを持って語っています。「ドイツは私の故郷です。」このことは私たちを豊かにしてくれました。

このことが私たちが直面している大きな統合という課題に対する自信を与えてくれます。しかし同時に私たちは要求します。故郷は開かれている。しかしそれはあいまいなものではないと。

新しく来た者にとってそれはまず私たちの言葉を学ぶことを意味します。言葉なくして理解することも理解されることもありません。それだけではありません。ドイツに故郷を求める者は、基本法の秩序、法治国家、憲法の尊重、男女同権という共通の信念に特徴付けられている共同体に加わるのです。これは法律の条文というだけではありません。これはドイツでの共同生活の中で成功するために不可欠のものです。そしてそれは放棄することができないものなのです。

そして最後になりますが、多くの議論や意見に関わらず、ドイツの民主主義の中で放棄することができないものがあります。私たちの歴史を認めることです。続く世代の人たちにとってはもはや個人的な罪ではありませんが責任でありつづける歴史のことです。二つの世界大戦からの教訓。ホロコーストからの教訓、あらゆる民族主義的な思想、人種差別主義、反ユダヤ主義を拒絶すること、イスラエルの安全に対する責任、これらすべてがドイツ人であることに含まれるのです。

ドイツ人になることに含まれるのは、私たちの歴史を認め、引き受けることです。このことを私は東ヨーロッパ、アフリカ、中東のイスラム教が多数である地域から私たちのもとに来た人々に対しても要求します。ドイツで故郷を求める者は、「それは君たちの歴史だ、私の歴史ではない」ということはできません。

しかしもし私たちの民主主義の中でこのことが異論なく受け入れられていないとしたら、どのようにしてこの承認を移民の人々から期待することができるでしょう。私たちの歴史に対する責任は幕引きすることはできません。付け加えますが、ドイツ連邦議会の議員にとってはなおさらのことです。

この国の一員になるということはこの国の大きな長所に参与するということです。しかし同時にこの国の唯一無二の歴史的責任に参与するということでもあります。私にとってこのことがまさに啓蒙的なドイツ愛国主義に含まれるのです。ドイツの私たちを特徴付けるものがあるとすれば、それは長期にわたる、困難な、苦痛を伴うとっていい私たちの歴史との取り組みです。そして多くの輝かしい側面と同じくドイツに含まれる深い闇への眼差しなのです。このことで私たちは諸外国から評価を受けています。このことに私たちは誇りを持っていいでしょう。

連邦議会選挙の後で私は、多くの人々がドイツに幻滅し、民主主義とその機関に幻滅していると報じる多くの記事を読みました。しかし連邦共和国に幻滅した人は、明らかに何かを連邦共和国に期待していることに皆さんはお気づきでしょうか。

私たちはこの国から多くのことを期待できると私は確信しています。この国は多くの危機を乗り

越えてきました。未解決の問題を聞き流すのではなく、未来の構築に着手する政治があります。これがすべての政治の主動機となれば私たちはドイツ人の大多数が望むドイツを保持することができますでしょう。それは民主的なドイツであり、世界に開かれたヨーロッパの国であり、団結している国です。

このようにあり続けるべきであり、このようにあり続けるでしょう。なぜなら私たちの国を特徴付けているのは知ったかぶりや、いちゃもんをつける者でもなければ、いつまでも憤っている者でもなく、あらゆることあらゆる人々に日々憤っている人たちでもありません。こうした者たちが私たちの国を特徴づけているわけではありません。

そうではなく私に自信を与えてくれるのは、問題解決に取り組み、私たちの国の中で日々達成と共通理解のために身を投じている他の数百万の人々がいるからです。

自発的に病気の隣人を看病する人、老人ホームで朗読する人、到着した難民を支援する人。片親の代わりに半日育児を肩代わりする人、多くの協会で私たちの国の文化の豊かさの維持のために尽力する人。村での生活が充実するように尽力する人、仕事の後で夜地方自治体の図書館やプールの管理をする人。臨終を迎える人の末期を見守る人。端的に言えば、自分のことだけではなく、他のことにも尽力している多くの人々のことです。

こうした人々が私たちの国を結び付けてくれています。知ったかぶりの人たちの知らないところで。こうした人々が統一を生み出しているのです、日々新たに。

## 訳注

<sup>1</sup> この演説は本文中にあるとおり2017年9月24日の連邦議会選挙の9日後に行われた。与党（同盟、社民党）あわせて前回比で14%の得票の減少、とくに第2党である社民党はかろうじて20%を獲得するという敗北を受け、社民党は下野することを決定していたため（特に青年組織は同盟との再連立を拒否している）第1党となった同盟との大連立政府の組閣交渉は否定された。連邦議会には極右政党ドイツのための選択枝党AfD（以下AfD）も始めて進出した。AfDはザクセン州では得票第1党（27%）の座を獲得した。しかしその後11月20日にはキリスト教民主同盟、キリスト教社会同盟（以下CDU/CSU。ただし、統一党派としては同盟とする）、自由民主党（以下自民党）、緑の党との間での四者（三者）連立交渉が決裂した。即日連邦大統領シュタインマイアーは、すべての政党、特に選挙直後同盟との連立交渉を否定し11月20日にも改めて連立交渉を拒否していたドイツ社会民主党（以下社民党）に向けて、国政への責任を果たすために、改めて連立交渉を始めるよう呼びかけた。11月30日にはCDU/CSUと社民党の党首（メルケル/ゼーホーファー、シュルツ）が大統領官邸に招かれ公式に連立交渉を促された。これに対し社民党は、それまでの姿勢を転換し大連立政権に向けての予備交渉の開始を12月7日の党大会にゆだねる姿勢を示した。シュタインマイアーは2009年の連邦議会選挙では社民党の首相候補者として社民党を率い、2016年の暮れにはメルケルの率いる大連立政府（同盟、社民党）から共同の大統領候補に推薦され、社民党、同盟双方から信頼が厚い。また、ドイツ基本法は政党間での組



- 閣交渉が成立しない場合、大統領が首相候補を指名し、また連邦議会での3回目の首相選挙の後議会を解散し再選挙を決定する権限をもつ。今回の選挙は連邦大統領がこの権限を行使する初めてのケースとなる可能性があるため、注目された。その後12月8日の社民党大会で連立予備交渉が承認され、1月21日に再度開催された党大会では連立本交渉が、56%の賛成で承認された。この交渉では三党党首の限界が示されることになった。
- <sup>2</sup> 1990年10月3日のドイツ統一以降、毎年16州が持ち回りで統一記念式典を開催している。2017年はラインラント・ファルツ州が当番に当たる。当州は社民党（州首相）、自民党、緑の党の連立州政府を持つ。ドイツ各州はチューリンゲン州では左派党（旧社会主義統一党）、バーデン・ヴュルテムベルク州では緑の党が州首相を出しており、AfDを除き、きわめて多様な政治地図となっている。
  - <sup>3</sup> ヴォルフ・ビーアマンは詩人、歌手。ドイツ連邦共和国出身だがドイツ民主共和国に移住した。しかし1976年西ドイツ巡業中に反政府活動を理由に国籍を剥奪された。
  - <sup>4</sup> ポーランドで1980年に結成された労働組合運動『連帯』、1989年のハンガリー・オーストリア国境の解放がドイツ統一に影響を与えたことを言っている。
  - <sup>5</sup> 1989年10月にライプチヒで始まった東ドイツ民主化運動が、ドイツ統一の原動力となった。メルケルもこの過程で結成された改革政党出身である。
  - <sup>6</sup> ゴルバチョフ（ソ連）とブッシュ（米）の支援が、ドイツ統一を可能にした。当初懐疑的であったミッテラン（仏）やサッチャー（英）もコール首相の意向に最終的に賛同することになった。
  - <sup>7</sup> シュタインマイアーの民族主義への警告は、AfDやAfDを生み出した極右運動（ヨーロッパのイスラム化に反対する愛国主義のヨーロッパ人運動Pegida）に向けられたものである。難民の大量受け入れ以降ドイツの世論は受け入れの是非をめぐる分裂した。シュタインマイアーはこの問題で国民の統一を図ろうとしている。
  - <sup>8</sup> シュタインマイアーはシュレーダー政権時代に官房長官を務め、社民党党首であったミュンテフェーリングとともに急進的な構造改革路線への転換に主導的な役割を果たした。労働市場改革を中核とするこの政策（「アジェンダ2010」）は、大量失業の流れを止め、国際競争力を回復させたが、同時に大量の非正規労働者を生み出し、賃金抑制効果も生み出した。2005年以降のメルケル政権はこの構造改革路線を引き継ぐとともに、その深刻な弊害を修正する政策に専念することになった。社民党はこの政策の結果、大量の支持者を失い長期低落傾向に歯止めがかからなくなった。これは同時に全国政党としての左派党やAfDの台頭をもたらした。
  - <sup>9</sup> その後連邦議会は召集されショイブレ（前財務相、同盟の重鎮）が議長に選出された。
  - <sup>10</sup> メルケルは2015年9月に緊急に、ハンガリーに滞留していた戦争難民のためにオーストリアとともに国境を開放した。この措置をメルケルは「人道的命法」として正当化した。その後欧州司法裁判所は、ハンガリー、スロバキア、ポーランドからの訴えを退け、緊急措置としてEU法に抵触しないとの判決を出した。「自民族に対する裏切り」はAfDやPegidaのスローガン。
  - <sup>11</sup> 2015年以降メルケルは社民党と緑の党の協力を得て、一転して難民抑制策を実施している。安全な出身国リストを拡大し（すべてのバルカン諸国が含まれるようになった）強制送還を主要課題とした。また2016年3月にはEUがトルコとの間で難民協定を結び、バルカンルートを実質的に閉鎖することに成功した。
  - <sup>12</sup> 「故郷」はこれまで保守的思想の中で語られてきたが、分裂社会を統合するキーワードとして持ち出されたことに注目する必要がある。シュタインマイアーは来るべき社会像として語っている。